

氏名（本籍） 日下 瑤子（福井県）
学位の種類 博士（音楽）
学位記番号 甲第17号
学位授与年月日 令和4年3月19日
学位授与の要件 学位規則第3条第3項
学位論文題目 デイヴィッド・マスランカのサクソフォン作品における表現の根源
—作曲プロセスの考察を通して—

学位論文等審査委員

（総合審査）	委員長	教授	加藤 一郎
		教授	青木 高志
		教授	雲井 雅人
		教授	横井 雅子
		教授	早稲田 みな子
（演奏審査）	委員長	准教授	三宅 博子
		教授	加藤 一郎
		教授	青木 高志
		教授	雲井 雅人
		准教授	高橋 聖純
（論文審査）	委員長		小串 俊寿（東京音楽大学教授）
		教授	加藤 一郎
		教授	横井 雅子
		教授	早稲田 みな子
		准教授	三宅 博子
			谷口 昭弘（国立音楽大学非常勤講師）

審査結果の要旨

1. 演奏審査

演奏審査は2022年2月28日、国立音楽大学講堂小ホールにおいて、下記の曲目によるリサイタルによって行われた。

デイヴィッド・マスランカ（David Maslanka, 1943–2017）

《レシテーション・ブック》より

1. 打ち砕かれた心：コラール旋律「三つにして一つになる汝」による瞑想曲
5. ファンファーレ / 変奏：「アダムの罪によりて」による

《交響曲第9番》より

第三楽章

《トーン・スタディーズ》より

1. ヨルダン
4. とともに夜を見つめて（Part 2）
6. クジラの物語（おお、血と涙にまみれた御頭よ）

《アウト・オブ・ディス・ワールド》

プログラム構成は、全て申請者が博士課程における研究テーマとしたマスランカのサクソフオーン作品からなっており、作曲家が各曲で求めた様々な音楽的・技術的要素を包含する申請者の高い意欲を示すものであった。このプログラム全体を申請者が高いレベルで、集中力をもって演奏したことは高く評価できる。

特に、弱奏でも強奏でも長いフレーズ感と音色の均一性が維持されていたこと、そして、強奏から弱奏へのグラデーションも見事に表現されていたことは特筆に値する。また、《トーン・スタディーズ》の〈1. ヨルダン〉でピアノの5度音程に弱音を美しく溶け込ませていくことや、《アウト・オブ・ディス・ワールド》でチェロの「弓のスピードや圧力」とサクソフオーンの「発音や息のスピード、圧力」の関係を良く研究していたことは、卓越したサクソフオーン奏者としての申請者の資質を示すものであった。

しかしながら、今後の課題とすべき点もいくつか見られた。例えば、《レシテーション・ブック》では弱奏での発音や *legato* での音のつながりにやや難があったこと、そして、全体的にその時々和声にとって最も相応しい音程が常にとられているとは限らなかったこともあげられた。

とはいえ、マスランカの様式を深く理解し、各曲の表現を極め、共演者の素晴らしい演奏にも助けられ、この作曲家独自の世界を創出することによって聴衆に大きな感銘を与えたことは、博士の学位の請求に際して求められる極めて高い水準をもつものであった。

2. 論文審査

申請者から提出された論文「デイヴィッド・マスランカのサクソフオーン作品における表現の根源——作曲プロセスの考察を通して——」は、アメリカの作曲家マスランカのサクソフオーン作品を演奏する際の諸問題を多方面から考察するものである。多くの先行研究はマスランカの存命中に行われたものであったため、本論文は彼の作品の全体像を研究対象にしたという点で包括性を持っている。そして、作曲者自身だけでなく、作品の委嘱者や演奏者、またマスランカ自身とインタビューを行ってきた研究者、彼の息子など、さまざまな人々の証言を援用しながら多角的な論考を行っているところは高く評価できる。巻末の付録も含め、サクソフオーン作品のみならず、マスランカの創作全体を知る上で極めて高い資料的な価値を有するものである。

その一方で、多くの証言や資料を収集した分、それらの内容が十分に咀嚼されておらず、議論に深みが欠ける面も見られた。例えば、第4章、第6章においてコラール、メディテーションが彼の音楽と精神性にどう関わったのかを実例を挙げて記述しているものの、そこに内在するはずの彼の音楽の美学的な側面にまで議論が十分に掘り下げられていない。申請者はメディテーションやマインド・フルネスを通じた「作曲プロセスの根底にある思想の変化」が音楽的变化の要因であったとしているが、本論で記述されているのは、マスランカの表現そのものの根源ではなく、表現に至る手段とその背景ではないだろうか。メディテーションとマスランカの抱く具体的なイメージ（聖母、海、クジラなど）との関係が丁寧に分析されているのに対し、「彼が求めた表現」については「時間の静と動の表現と静寂」、奏者の「限界を越える」表現であったとし、その背景としてティク・ナット・ハンの思想があったことが示唆されるに留まっている。また、たとえマスランカ自身がコラールについて、歌詞内容までは作曲プロセスに含まれていないと証言していても、キリスト教国でカトリック信仰を持つマスランカが、受難や復活といった聖書内容をコラールのタイトルや音楽内容から想起することは充分起こりうるであろう。「結論」ではほぼ各章のまとめが行われているに過ぎず、そこから得られた知見、さらなる課題への展望が述べられていないことは残念であった。

とはいえ、申請者がマスランカから直接インタビューを行い、多くの資料を収集し、議論を多角的に展開したことは高く評価できる。指摘された点はむしろ、申請者の今後に期待する事柄とすべきであろう。本論文は独創的内容を含む労作であり、全体として極めて水準が高く、博士論文として十分に相応しいものである。

3. 総合審査

申請者は確固たる信念に基づいて研鑽を積み、これまで学内外で演奏活動および研究活動を活発に行ってきた。演奏審査・論文審査共に評価が高く、「自立して演奏会を企画し、説得力のある演奏を行うことができる」「自己の演奏や創作を進展できる研究ができる」という本学博士課程のディプロマポリシーに相応しい。また、本学における TA や他大学における教員経験もあり、「高等教育機関において教授できる」という条件にも該当する。以上のことを総合的に評価し、「博士（音楽）」 Doctor of Musical Arts の学位に相応しいものと判断する。